長周叢書

唐太話

全

[6]

026731-000-1

5-1

唐太話

布施 御牆／述

村田 [illegible]／編

M24

ADD-0427

No.2147

唐太話序

こさふらはくもりもそする陸奥の蝦夷にお見せそ秋のよ比月とゝめはかり歌のこさふかハてふもしめの句いといふあしとてもやくよそくさ〻歌謡ともありてあるハ汐風のことゝいひあるは濱のまさゝ乃事といへれをかせよりてかこちたるなるへしまさこハこさのさを砂のもしれもひよりたるなるへしされハいつれもおしもありあれのそてをしのきさら波の八重をる沖にたゝよハてハこれさん事かなうましけれも離しの人らさか危き境にのそみて書簡ひとつの本をきもめんとはすへきこゝにうゝをあす小郡の縣よつける朝もよし岐波の里に三保の海幸翁といふ人ありわらき時よりうゝつ路のあとにさうしかりけれハ沖の國のあき人某あもたる船の長となりて天つたふ日の本を離れ言さへくからふとの島よあまたゝひらよひおのつかちかしと

の詞をも聞さとりかしあのあるさまをもわきまへきたゝそれのみあらず大あた蝦夷か千しまのおくふかく尋ねしりたりけるを縣の司某こはおかしくもおほゆるとさかを何くれの書のたよりにこそその島々のことくさとて見たることもありけれまのあたりのものかたりはいかゝめつらしからむと皿長よ仰せて翁かいふまゝをかきつゝらせられたるゥかくひとゝちの册子にゝあれるなりけりけよこゝとはとるあゝへたゝれる國あれハ春の花の夏のさかりよ咲き冬れこほりのうしほのうへよ閉るなといとゝめさむる事ともおほしこをよみてもわかすへら御國の寒さあつさ時をたかへすくひものきものにきゝひたらへる難けさハまつおもハるゝなりあハれ海幸の鎖ふることの道よおりたてる人ゝらましかゝこさの事をもきゝめつへうりけるものを

天保のとをせより三とせ

二葉園の主陸

唐太話

長州下の關より松前へ乘るゥゝ丑寅の針（船の向ふ海路也）にて五百里松前より唐太へゝ子丑のとり（同前以下準之）ゥて三百里なり

唐太ハ蝦夷の地より海を隔さる一大島ゥり其地勢によりてハ遠近もあれと大凡近き處にて蝦夷のシルレ崎よりカラフトのノトロ崎まて纔ゥに十八里ゥ海峡太平洋の間の海峡なり

の〻也いさは百年ハゥりも昔の事にや播州兵庫の住人芝頭松前に行通ひける時此カラフトの地よ初て至り自他交易をなしりて一ヶ年千兩の御運上さゝけんよしを松前侯よ願ひけるに許容ありけり夫より此ゥ〻此島ひらけたりとそ其後ハこの芝屋ゥ支配とゥりたり

此地大寒地ゥるゆへゥ地震といふ事ゥく又神鳴ゥする事もゥし其風土大體蝦

夷と同し南の風あたゝかに凍風さむし

クレユンコタンといふ湊に運上屋といふものあり此所千両場といひ習したりこの運上屋ハ九間四面の貨木屋あり御役人方其外百人内外の人詰居て取立するありそこよ夷人の家居もおほよそ三四十軒ハありもあるへし

この地先年公料とありてよろつの事〻ハ公儀御支配の時

評曰或家覺書ハ松前若狭守右蝦夷地之儀ハ古來より其方家にて進退致來候得共異國端の島ハ万端手當難相整樣子よて先達而東蝦夷上地被仰付公儀より御仕置被仰付兩蝦之儀ハ非常手當等進退難行届段申立外國境不容易之事被思召候此度松前に西蝦夷一圓被召上依之其方へ新規九千石被下置候場所之儀は追而於脇之間老中列座伊豆可相達候文化四卯三月廿二日被仰渡之とみへたれハ違ひなき事あり

江戸よりの御役人吉見何かしといふ人詰居られたる事ありしに或時の物かたりよ我も爰ハ寒中よ詰居たるに夜中にあれは惣身針をとゝて刺るゝやうよおほへて絶て寐られさりしこれみな寒氣のあらたよすき通るゆらん其苦しさいとんあたゝかりしといはれたりさて又たその時數十人の詰居ありけるか嚴寒ふたへうたくて病人死人もあまたに及ひけれハ後よ此島のシラヌシといふ南向の浦あたゝかなる所よ御番所立變りたりしよし

評曰或秘書云文化四卯年警師樂田某か戸田調谷の兩氏に隨從してユトロフ島の會那の會所に詰居たる時故オロシヤ亂放に出會たる事をしるせり(上畧)

元來兩家南部津輕勤番は會那ユトロフ島の内也會所元は南部家勤シベトロウルツプハ後外界なれハ津輕家よて可勤ありともシベトロは遠方北向の地ゆへ番所はうりを立夏のうち相詰氷海よなれハ越年の人々を殘し會那の本陣所へ來り居て寒氣を凌しゆへ兩家ともよ本陣屋會那にあり云々とありてこれハ蝦夷の丑寅のうたにある島の事にて本文唐太島といひと隔る事あれと實よ寒氣の堪あたきあたりなれハその例あることと疑へくも

あらし

此島カラフトの海邊ハ冬月にかゝる比よりハ氷とつるよしなりシルレ崎ノトロ崎の十八里の海上一面ヨ氷ふたらるゆへ船の行通ふ事もならさるなり二月末三月初旬のころより厨太蝦夷の海際こゝあしこより解そめて陸地に付たる所より氷とけ離るゝ故潮汐の往來風波の搖動につれてああたこあたと海ようあひありくゆへヨ是かさめヨ船をとゞめられ甚しきハ船を損る事もあれハ此氷の樣子を見されハ乘出さる事也漸八十八夜を過て後松前より乘出し四五月の比厨太に渡る事ありされとも猶其氷の碎けて解殘たるが深ひ居る事ありその厚さ壹尺四五寸又ハ二尺ばかりの氷なりけり是をもて冬の寒さをしるへし（寒語に氷をしがといふなり）

評云船長日記ゐ（尾州知多郡半田邑の十吉北外文化十酉十一月漂流し翌亥二月赤道十五度日輪北の方見ゆる洋中において初てイキリス船に助け乘られてオロシヤの屬國赤道七八度日本と足を合たる國に至て翌十四丑年五月長崎に歸國したる迄の事を記したる書なり）イキリス船の船頭ベケッが日本人ヨかたり聞する事ある内ヨ（上畧）カムサスカの北海ハ氷海につゝきて九月より明年四月迄は海一面ゐ厚さ一丈とありも氷りて船の往來ありかたし五月稍く其氷とけぬれと撞けたる氷の風ヨてあゝかしとへ吹よせられ一あたまりにて小さき島のやうになり海上に流れありて是を氷山といふなり常の氷よりもかたくするとく走船の夫に行あたれハいたくそこなふゆへに六月ヨいさらさをは船ハ出さす六月より八月まて三ケ月の間ならてハ船通ふ事ならす夫ゆへ惣して北アメリカのあさりを乘船ハすへて鋼を以て張詰る事なり云云さてまさ同記中に過し年オロシヤ人蝦夷にて亂放のとき酒樽を奪ひ持歸りさるに酒氷りて出されハ樽を打碎きていさしされハ樽の形りに右の如く氷りさるを斧をもて酒を打わり目かさに掛て賣さりしよし見へさり

クシユンコタンヒ邊ハ五六月の比に至りても井戸に氷りとち塞りたり夫を

大なる柱の如き材木をもて衝わりて水を汲取なり其氷の厚きこと二尺五六寸はかりも有り

日本より行滞留人にハ六月の頃に至りても東風ふくときあとハ綿入布子重ね着てたんせんやうのものを上着ヨせされハ寒さヲ堪あたし然をとも蚊あと夏出來るむしハ濕山に居るかりこの蟲ともゝこゝに生ずをハ夏の季候とおもへるにやおかしかる事あり

前に記せし如く六七月の比日本の人々ハ其寒きに堪さることあるにかしこの小兒輩ハみな本邦の夏とひとしく海河に入て水をおよき戯れ遊ふあり是等ハさるさむさをも暑しと思へるにやこれまたをかし

七月の比よいたり櫻盛りヲ開く日本の野さくらとかをることとかし

コンブイといふ處に欺冬の長さ一丈余り回り七八寸より尺にいたるものあり て此島の名産とするあり

箭の羽ヨ人形のふ八文字のふを顯たる抔色々様々の上品をいたす皆マンジウあたりの産物ヨしてかしこの夷人等もちわたるありけり

リクンカモイとて猫ほどの太さヨして曲りたる大きはのある獸もの居るあり

ナカイタヤペ又オキナトモイフとて鯨をのむ大魚あるよし其魚の牙とて唐太人のもち居たるを見せし事あり其ながさ一尺五六寸ハうり根の太さ六七寸もあるもの也或人ハ一角と相似たるものヨして其功能これに倚して醫師かとも折々用ふることあり

評云三國通覽ふ東海ふサキナといふ大魚ありて甚長大にしてよく鯨をのむといへり其全躰を見たる人かし只稀に浮出る時脊と鰭とを見る事かり其脊の大なる事島山のことしといへり此魚來る時ハ海底雷の如く鳴響く鯨東西へ逃去ときハ漁船もサキナの來るを知て速に上陸すといへ

り都て東海の漁船ハ度々見出遭ふとなり云々と見れハ本文の話自然ゆ
偶合せり

シヤチといふ魚あり是また鯨を殺すよし其牙とて長さ三寸餘横ひらたきものにて根の幅一寸七八歩ハありあり唐太人にもらひ今ゆ秘藏せり功能前に同しきものゝよし或人の語れり

評云三國通覽にカミキリ魚其鋭鋭にして長し劍魚の類か此魚よく鯨を殺すと云りといへるたくひにもあらんゥ

この唐太に青き玉のさいく物大小様々の風鎖根つけ結しめあとの品々あり元來マンヂウの産物にしてサンタン夷人多く持渡り交易せしものあり是より蝦夷松前其他の國々へも弘まることとなり彼蝦夷唐太あたりの女の首ゆかけたる色々のあさり玉もこのものあり

評云三國通覽ゆカラフトより蝦夷へ交易する産物ゆ青玉鵰羽煙管蜂紬文紬綺等あり其うち青玉はカラフトの産物なり鵰羽ハカラフト及蝦夷の産なり云々

按に本文とはいと遠ひて疑實いかゝと見もれともこの三國通覽は天明五年の著述本文は文化このうたの事也凡この比よりして蝦夷唐太ゆと殊更にひらけたり林子平か此著述の時また北物産の出處を探索をわたいさんしし故の事あれはあなかちに疎闊とハいひ難かるへしたゝこの本文の話ハかの唐太の地ゆ廿年餘往還して見聞せし實事也

綿帛さま〳〵のぬひ織物さらさ染やうのもの陶器烟管などの類唐山韃靼滿洲ゆたりの産にして他ハサンタンの夷人等唐太へ持渡りしものなり

サンタン人ハカラフトのうちレフヌシといふ所に渡り來て交易するなり此浦におきて唐太人ハいふゆ及ハす蝦夷其他の夷人來り集りて諸品をとりかふる也このサンタンの夷人はこゝよりよりの所へ來る事禁制なるよし頭ハ惣髮ゆて三ッくれに組下けしろき木綿の衣服をつけて粗朝鮮人のかたゆ似たり

此地のルウタカ河ハ河ハゝ五拾間餘もあらんゥあちこちに大木流れとゝま

りてあれとも取除るといふ事もなく又河邊のみきりひたりも水の自由に任せたりと見えて土手堤の背丈もおし汀にやおきのいと大なるゝ打向ひて夥しく並生たり

トウプツの渦ハ方一里ハゝりの入海にて千石餘の大船いかほともゝ〻りつへき所なり因にいふ唐太蝦夷あたり格別ゑ船ゝ〻りあとといふ渓なき事なれは其暗瀬の間に船かけて風潮のあよふ時を待事なり其暗瀬の間よりても浪の打よする事穏やかなるものなり是を海こゝの瀬といひ習しさりシヨヽヤの渦ハよほと廣大なる入海なれとも窪干潟にして船なとかゝるへき海あらす

唐太の人家大かたハ蝦夷の造りかたに似たり其家の屋根ハ蝦夷松といふ木の皮あるひはよしあやの類にて葺いと麁末なる堀たて家なり勿論戸障子壁あとのものも絶てなき事なりけり世の人の昆布ゑて家のやねをおほふよしいへれと數十年の間あちこちと經廻りたるゑ見當たる事なし

評曰三國通覽に昆布の事ハ世ゑ知る所なれは不記とありて天明れいにしへまてハありし事も實事ならんに事闕けたるのちハさやうれ無益のわさをとゝめて今の様にありしならん

トナカエといひて其あたち全く鹿と同しく角の長〻三尺五六寸より五尺ハかりは至り枝あまたありて其丈〻の大なるハ馬よりも高く見ゆる獣もの居るなりチロッコといふ所の夷人等此獣をかひ養ふに野草をはまするなりさるゆへに其繁きかふ所の草の盛果る時ハ又外の草ある野ゑ我家とも移し獣をもつなきかへてはまもるとそ冬の比かのチロッコよりクシユンコタンれ邊にそのトナカエに乘て來るなりこの角を數本唐太人にもらひたるを持かへりて人ゑもあたへまた宮市天滿宮その外の神社へもさゝけおきたり大なる珍らしき角なり

この唐太とサンタンとを別境なれとも汐の干落たる時ハかち渡りして通る

丶よし人の物語れりとかれとも其處ゑ至られさる事かれいいうある處ゑや
また此唐太の地竪横いかほとの里程ならんあよはとの大國とおもてれさり
日本の支配地も其奥行幾里あるや蝦夷に向ひさる海際大凡シレトコの邊よ
りトンナイのあさりまて七八十里ほとの間なりと承りぬ
唐太蝦夷の渡り近き處ゑ十八里の程あるゑその外に出崎離島なと一ゝも見
たる事なしましてサンタンあたり秋明に日にも見當りし事あしこの唐太に
出崎よほと東南つき出よそとハ海上遠隔さるあらんと思ふるゝあり

評云三國通覽ゑ蝦夷國に北ゑ又一國あり蝦夷に西北界より僅あゑ海上
六七里を隔つ此地をカラフト島といふ本名ポロイカイ亦ポロカイともいふ案落二十一在其
回、三百里に島と云傳ふれとも其詳かあることを見たるひとあしたう
れとも近頃輿地の學委しくなりし故此地の事も大略辨すへきゑ似たり
此地全く離れ島にあらす東韃靼の地續き最邊に地方にて東南海の一出
崎ありと云々白石先生ハ萬國圖の野作といへる地ハこのカラフトある
へしといいれたりさて其西北の方へ續たる所ハみゑ嶮山岩石ゑて通路
し難し其山を越て西北の方にサンタンマンレウといふ地あり思ふゑカ
ラフトより滿洲の都まてハ甚相遠あらす云々とあれとも蝦夷唐太のわ
たり十八里と本文ゑあれハ數年其地に馴たるはれしに誰かハよらさら
んさて也た唐太ハ地續の一出崎とあるも先ハ本文の一大島といふ事よ
ろしうらんか

クシユンコタンの近邊の人家にて犬をかふ事稀しき事あり本邦の犬より太
くたくましくて大凡犢牛のふとさある犬ありこの犬生るゝとやかて陰囊を
きりて捨るとありさすれハ力も強く體も健らにて物につうふに利あるよし
其犬ともを集め船を牽せて諸物を遠地に運送するあり十四五疋の犬ゑ各首
輪を入つあき付て夫を船のつあゑ結ひ牽すなりそてまさ其數疋れうちゑ船

頭犬とてすくれて太く見ゆる犬ありて今や船いたさんといふよ至れハ彼犬さき立出て其場所よ至るこれを見て殘る犬ともゝ皆次々そこに打揃ひ船頭犬ハ歩み出るにならひて諸ともよ率行事至て速あるもハ也一日に十五里二十里ハ道を輙くそこふあり炎人等ハ其犬を遣ふ事妙よしていと〳〵珍らしき見物あるはそハ船に乘りてひかせたりし

評云船長日記に(上畧)扨雇船にのりて犬にひあせてありく也そりをサンカト云ふ木を二本竪ふ並てその上に巨燭やくらの樣に組たて中を高くしてまたきて乘らるゝやうに造り皮ふて作りさる綱をつけ其綱を犬五疋か六疋にて引するにより犬を先よたて二ヶあハよ立並て引するあり志りへふ立る犬はあしくてもよし四辻に至れハ犬いづ方へゆあんと差圖をまちて居る時カツ〳〵といへハ左へ行ホカ〳〵といへハ右へ行ヒコ〳〵といへハ直に行アヽ〳〵といへハ止るあり棒の本の方をとあらかし頭の方へハ錫杖のあとき鐵の輪を付たる物を持て木あとへ行當又ハ片つらへより過あとする時其棒のもとにてこちて直すあり犬の進ぬ時ハ夫を振上てから〳〵と鳴せハ先よ立たる犬すゝミ出すあり云々(中畧)一軒の家よても是ハ離ら犬かれハたあ犬とて銘々ふ食を與へ飼置事也食ハセリジ(にたんの類也)を五ツ六ツ宛もあたふる也遠方へ行時ハ前夜よ八ツ九ツ計飼置て其朝ハ先へ行迄たへさせぬ也早く行てたへんとていそく也犬をもたぬ人遠方あとへ行よハ粗しき人の犬を借りてゆくあり其時ハ前夜にこあさよりセリジを持行てたへさせる也カムサスカの西イナカヤマリの邊ふてハナレン(鹿をいふあり)に引する處もありとそ云々又環海異聞其外の書にも見へて此本文の趣と相似さりとゝに拔出して作者の意を助るにあん

此地の船大槩朝鮮船の形に似さり船のかはらハ丸木をはり穿ちて上棚ハ數

本の木を寄せ其合めを革にて縫綴さるもの也長サ三間ハかり幅三尺ほとの船よてそのうちに夷人壹人又ハふさりも坐して兩の手に二ツのうひ柄をとり水をかくなり船の行こと至て速かなるものなりこれをほうがんかび車がひあとといふとそ

評云此判官あひ又ハ亜あひといふ名に付て故よしあらん事ともおもハるれとこゝにハ省きぬ

クシユンコタンの邊よ詰居る支配人其外八九月比よりは日本の地に歸り來る也其うち三四人又ハ七八人あと折にふれ越年番とて殘し置を番人といふありこの人々はかの厳寒に堪かたけれハ土中に高さ五六尺計り方九尺ほとの穴居をしつらひ其上に屋根をわたして四方には熊の毛皮をかけれき其うちよ火をたきて寒氣をふせくことあり

この地の産よイタラッペイ（アトガ）といひて大地の布のやうなる織ものありそれに本邦より渡たる紺藍黄坏の木綿の切々を木綿絲にて色々様々なるもやうよ縫付て着服とす蝦夷のアッシよりハせめてはよろしき者也本邦より行たる船頭舵子あとの折々ハ持來て着るものあり

江戸の御役人間宮何あしの君先年船を浮へサンタン其他の國々をうかゝひみられたりしあ其折手つあら海上外國等の繪圖を書れしを松前ハ支配人前田何かしよ與へられたるをまたうち〳〵よ同人より傳へもらいて今よ秘藏せりさてまた我先年初て唐太邊よ至りし時松前能登屋八九郎といふ人より船路明細の繪圖をもらひ受二十餘年間彼洋中を往來せしなりかの間宮君の圖地名あと少しの唱違ひハあれと地理方位に至りてハよほと吟味ありしものと覺ゆるなり

評云或家秘書エトロフ敗走ハ所に（上翠）開谷氏にて蝦夷言葉とせられす地理ハ不案内なれハ我等居殘可申といふこと也林藏（間宮）ハ蝦夷詞に至

て通し其上これ島れ繪圖を仕立新道開方を勤し故地理も功者ゆへあく
は云れしあり云々とあり又或人れいふ間宮氏か蝦夷れ地理にくるしく
猶また此勤功ありて後にも受領をもせられたる人れよし
唐太のトヽ島へ回り十七八町もあるへく人の住家あし海鹿多くあある島あ
る海鹿をかしこまてトヽといふ故かトヽ島と唱習したり夷人等是を収得て
膏をとりて賣あり海狗は諸所より多く取得あり形犬の如く尾みしかく顔も猫
より似さりこの油を燈ち油より用むて火消ることあし松前にても是をあけ油に
用ふ至て淡薄の風味にして臭氣あくよろしきもの也（蝦夷も亦同し）
島ものも大根の生たるを多く見及ひたり五月植て九月よひきとるとあり
（蝦夷も亦同し）
この地すへて味噌醤油あともあるさゝ魚鳥獸の肉を潮にて煮て食ふなり
地廣く人少あきゆへ山々よも大木夥しくまた枯木草茅多く木の葉塵芥あと
も高く積重りてあれとも人の拾ひとることもあし先年何としてゝ山林に火
入て九ヶ年たりも延たるよし夷人等云傳へたりけよそもありしか今にお
きて山より火入んことを甚慮れて心を用ふる事いとあつし
諸所蝦夷松の大樹多し本邦の椴の木に能似たる物也
カッヲといふ木ハ木色赤く本邦のむむろの木によく似たり（蝦夷も亦同）
大寒地ゆへあ竹生せすみあ本邦より渡る也（蝦夷亦同）
熊の子をかふもの間々あり形ちは本邦の熊と同しけれと月の輪といふもの
なしまゝ魚肉を食ふゆへ膽の藥能とうすきものゝよし或醫のいはれしあり
鰊を半夏より網をいれ七月のあけしまふありこれをとり得る事夥し蒸しあめ
て漸をとりて賣る也彼蒸しうすい多く阿州ゟ登りて藍の餌ひとあるよし
鮭ハ秋彼岸にあみを下して土用にあきるあり河々にのぼる事號に夥しくて
ゝとへうたあき程の事也（蝦夷も亦同し）

鯡ハ正月の末つゝさに網をはしむ三月の比海藻ゆ子を產付るあり是も前に同しく粉しきことあり（蝦夷亦同）

評云三國通覽蝦夷誌曰（上畧）魚ニハ鮭魚鱈魚此國ノ產物ニレヲ夷人ノ常食物ニ充ル也沿海ノ諸水鹹淡ノ相雜ル處鮭魚ヲ產スルコト他邦ニ比類ナシ歲七八月鮭魚河ニ泝ル時河水是カ爲ニ濁ヲ流ズ乃チ徒手ニレヲ是ヲ取コト山ノ如シ則チ火上ニ熏レ乾レヲ脂トス（即チカラフト）又鱈魚アリ此魚聚ル所嚙弥爾ノ如ク水上ニ浮フ乃チ網シテ是ヲ取コト又山ノ如レ又乾魚ニ作ル此魚子アリテ腹ニ滿ツ割取ヲ腔トナス（即蝦の子なり）此二魚ヲ以テ一年ノ食ニ充ベレ（蝦夷ノ地五穀不可植天地物ヲ生ルヲ食ニ充ツ實ニ造化ノ妙）此二魚ノ外海獺鯛魚多レ是又食ニ充ツヘシ云々と記して本文唐太島のさまおもひやらるゝあり

女夷ハすへて蝦夷の如く眉毛一文字につゝきたり（男夷は眉の間ちいさく細く）嫁して後ハ唇のまわりに薄く入墨する是日本の鉄漿を付る所也いまた嫁せさる女ハ頤せす頰に草木の形入墨しさるやと人のとひしか唐太ハいふに及ヒす蝦夷にても見さるなりと答へし

評云三國通覽女夷の圖に女はみな面に草花或格子なとを入墨にする也唇をハ薄く紫して青色にする也とありて本文の意味とハいと違ひあり前にも論したる如く天明のむかしハさもありけんをおのつゝら　皇國の風儀のうつりゆきて今ハ其草花なといるゝことはやゝたるならんめこの所の長たるものをとなとといふ其人の妻なと本邦の古手を下着にしてイタフツペイ（カラフトニアを上著にするなり）を上著にするなり下品の女夷ハ肌ヨ犬熊鮭海狗なとの皮を著て居るなり

キナといふもの敷ものゝふするなりおまことにかやなとのことき物をもて色々のあやを組付たるものなり（蝦夷亦同）

評云或家秘書に（上畧）帳役行十郎アリムイの夷小屋ヨて雨ヨ濡し衣類

を焙り居しめへカチへ赤人來れりと知せし故片隅のキナ（蝦夷の唐太）の陰へ身を隠す所はや赤人來り一人爐邊へ坐し鰊の干さるをくちひ傍に酒ありしをのみ行十郎を探り出し何あいふ云々とありて唐太蝦夷ともキナの敷物なる事論おし（アリムイもヘカナも蝦夷に近き島のうちの地名なり）

又或評云蝦夷團小兒の事をヘカナといひオロシヤ人を赤人といふ

驚多く日本の蔵のあちこち居る如く濱邊おとこゝうしと飛ありくをよく見るあり（蝦夷亦同）

オロシヤの賊船文化三年四年にカラフトエトロフエゾおとに來り亂放せし後ゆ大坂より松前へ大砲（ホウ）數々積下るへき仰言を蒙りつゝ下りけるか其内に長サ二間へかり玉目三貫五百目といふ廚あね簡の鯨形までもいろ〳〵のほり物したる御道具一挺ありこれは朝鮮より御とり寄りもの〳〵よし上乘の或役人のうち〳〵の御物語りおりさてまゝ黒かねの簡にへ玉目一貫五百目又へ一貫目抔もありて孰も大おるものおりし數へすへて十四挺おり海の上ゑわりおくかの地に送り届けしか十五ヶ年の後ゆいたり又大坂ゆ運送せよとありて積歸たり扨まゝあの阿蘇舎の亂入の翌年の蝦夷唐太抔の海邊御防きとして御大名御旗本與力同心衆其外數多出張し給へり會津より唐太へ八百人餘津輕より上蝦夷唐太邊七百人餘仙臺より蝦夷クナシリ邊へ千人餘南部より同エトロフ邊へ七百人餘いつれも三四月の比迫々に渡海ありしゝかの會津の惣大將に北原采女（御家老三千石）といふ人又日向三郎右衛門梶原平馬なとへる御家中以下百人餘同勢の人々共ゆ松前城下より乘組おてクシユンコタンへ渡しさりさてまゝ爰の山ゆ廣き平地のある所へ大なる陣屋をかまへて滯り居られたり（此陣屋へ松前にて切組出來て持渡る也そへて板圍おり此外みそとやうゆ塩干大根のるいさま〳〵の食物みおさきに大坂にて仕入おり陣屋おりし事の）

しある時ゆ此邊の廣野ゆ方三四町もある所ゆおきて防禦の習練といふ事ありけるあ一番五十人鐵砲組弐番五十人弓組三番五十人鎗組外に歩立（カチ）武者又

大將陣等ありて鐘太鼓など打鳴し馬ゐるし旗幟など多く立眞しいつれも甲冑出立の働きありし我等うほとの事初て見受たれハまことに目の覺たる事ゑて言葉に盡しかたしさてかの乘組の因緣もあれハよや北原氏はじめ人々の乞るゝ折々此陣屋にいたり何くれと物語し事もありけるゑ武器兵具あと甚うるたしく堅固ある事ともありし彼北原の持たりし鐵の扇子を辨才天の祠ゑ奉納せられたり（浦塩運上屋ある所々にハ八月の頃カラフトよりこの人々乘組にて松前に歸り十月に奥州御厩（おんまや）ふのへり互に事あくわかるゝ程の嬉しさいわん方なうりし（此上屋は皆この神を祭る也）

評云本文に唐太島の事阿蝦夷の亂放あとこゝかしこに見へ侍れハ是あれ記中を拔萃して作者の談を補ふ或家覺書に松前西蝦夷地唐太島沖合に去ル寅九月上旬の比異船一艘相見へ候所同所クヽユンコタント申處へ橋船にて異國人數多致上陸何之譯無之處番屋へ鐵砲を打掛越年番驚き

狼狽候内理不盡ゑ引立彼船へ連參候また圍置候品々不殘致亂放其上番屋の減圍船等ゑ至まて不殘火を懸候而其所出帆十一月下旬比カラフト島の内北の沖合に相見候よし夫より中旬の比又々一兩度右之船沖合相通り候段注進有之候（中略）兼而手當中付置候人數之内弓鐵砲の足輕百人不取敢差立領内手寄海岸へ差出候（下略）卯四月廿三日云々南部候より御用番牧野備前候へ御屆と見へさてまた去ル三日クナシリ島詰の者同所會所へ呼出中村小市郎向井勘助（評云或家秘錄ゑ（上略）トウブツの先にて（ソヽ度エトロフ島の變に依て歸島の事あれハ川心藤敬會所前幟數多立連て幕打杯して服ハし詰合向井勘介殿に逢ユトロフ亂放の事を申聞谷氏傳言を述云々卯五月の事なり）立會此度エトロフ島の沖へ異國船二艘渡り來りクレユンコタンと申所の番屋へ鐵砲を打掛番人七人並蝦人二百五十人程生捕番屋殘々をも不殘燒拂エトロフ會所沖へ湖あけ致居候旨申來る（中略）東蝦夷地へ物頭二騎目附役一騎小奉行十人弓鐵足輕二百五十人差出置候（下略）卯五月晦日

云々南部侯より御届是あるよし（評云津軽家其外諸侯御沙汰物等あれと愛に省）さてまた同番より去六月廿八日蝦夷地ソウヤにおいて深山宇源太私家來之者へ申聞せ候ハ異國人共去秋厨太島にて捕行之者せん比エトロフ島にて連行候番人之内二人相殘し八人ケイレフ島より相返ー右之者へ爲持申候文通に先年交易之儀相願候處長崎へ相廻り候樣被仰付同所へ使者を以申上候得共罷越候甲斐もなき事に付幾重も交易之儀預御聞濟度此儀御叶不被下候へ、來早春大軍を差向如例不殘討取可申との趣松前役人中樣魯西亞との紙面有之猶又爲對談ソウヤへ可罷越との儀有之候得共對談と唱へ候ハ手段之程難計に付爲心得申達（下累）卯月十九日云々と見へさりとの去秋云々とあるハ文化三寅九月上旬亂放之事也さてまたオロシヤ番膳に先年交易之儀御願云々とあるよつけ其因起るの趣意をこゝにあらハす或家阿魯舎船渡來一件といふ所殘の記ム（上累）寛政五年乙丑六月廿六日漂流ノ人ヲ送リ松前ニ來ル東都ヨリ兩氏（石川村上）ニ命シテ信牌ヲ賜フ其命ニ曰爾後交易セント欲セハ長崎ニ至リ奉行ノ指圖ニ可隨ト羽二疋二十把米五十俵左文字造太刀一振ヲ以ス然モ其進物ヲ不受ト云葛掃力鮮納王崩ス新帝曷勒吉散毒縷即位新帝三年一千八百三年（日本享和三寅六月廿四日ニ當ル）彼國使烈蔓歌突ト云フ者阿魯舎國王ノ綸旨ヲ持ヲ江戸將軍家ニ使ス此年文化元甲子九月七日阿魯舎王ノ綸旨幷獻上物ヲ持長崎ニ來ル其物金造ノ時計大鏡蠟虎皮象牙細工器鐵砲大小其他彼國ノ產物奇物獻上各結構ナル品也長崎奉行ヨリ使者ヲ遣レヲ命撿之使者船ニ乘移レハ來使ノ近從二人佩劍爲銃ヲ持左右ニ立戸外ヲ固ム室內皆金銀ノ彫物餝彩光爛トシテ不能合目中ニ在壹人胡床ニ踞ヲ坐ス貌狀端儼ニレヲ形如塑像使者ノ來ルト聞ヲ胡床ヲ下立則人也使者愕然タリ主客坐定テ自ヲ其鼻ヲ指ヲ日身ハ阿魯舎國王ノ書簡ヲ持參ス日本ノ文字漢ノ文字阿魯舎ノ文字

各一通何レヲ用ヒン且今日ノ對談舌人ヲ不用シテ可用和語乎使者曰通辨スル事ハ係舌人也日本舌人ニテ不通加被丹代之使者即進ヲ國王ノ書簡ヲ取ル使者曰此度來コト交易ノミニ非ス阿蘭舎國王事ヲ日本ニ信義ヲ結ン爲也故ニ船中ノ献上物ヲ江戸ニ持參シテ將軍ニ見エ國王ノ書簡ヲ渡シ且御返辭ヲ頂戴シ献上物モ亦江戸ヘ持參致シ是我國王ノ命如是故ニ此所ニテハ不得渡又信ヲ結ヒ互ニ交易致ストキハ日本ノ求何物ソ倘難船ノ者アラハ早速ニ送届ベシ本國ハ雖遠屬國ハ不遠或ハ亞墨利加國ノ内葛時納卒窟國ヨリシ或ハ曷勒務德吉斯國ヨリシ或ハ葛毋日陽卒棚ノ内ニアル庚勒吉斯國ヨリシ舟ノ通所ニハ何國乎无不往何浦乎无不到獨舟非一般而已亦唯所命ノ儘也是ニ於テ掠使又國法ニ依テ船中ノ兵器ヲ可受取ト云使者拒ズシテ皆悉渡之而日身ニ佩タル劔ハ我國ノ掟故不得渡ト云掠使歸テ其旨ヲ奉行ニ申上ル奉行即指紙ヲ筑前福岡城主松平官兵衛肥前佐賀城主松平肥前守同國大村城主大村信濃守三大名ニ遣シ番兵ヲ出シテ守之翌八日飛脚ヲ江戸ヘ上シテ以テ嚴命ヲ待云々（中略）其船ノ長二十五間幅八間深一丈五尺衆八十五人内漂流四人廿三ヶ月ヲ經テ渡來ス云々同番中ニ文化元甲子年異國船入津に付長崎より江戸表へ申出候趣ハ前廉伊勢國人彼オロシヤ國へ漂着之者四人乘來り返し彼國交易之儀ゟ付入津相願一往被差免候此時松平越州老中ナランカ右ゟ付此度献上物品々調參候由御引受無之俄に長崎へ出張役人等堺を被差出夜へ提燈明松万燈沖よりの見入賑敷やうよ被仰付兎角賣買不被仰付よし異國人申候へ一往御約束有之處ケ樣無氣に被差返候儀兎角能歸り候ても又一兩年之内及軍職之外無之筋と相見へ候由申候得共何分右之通に付爲御挨拶米千俵麥粉千俵塩八百俵被下置此以後參り不申樣にと被仰聞云々

おと記しあれハ若くハ此趣よりて文化三四年の亂放もあり猶前よあ

るやう來早春大軍を催し來らんあと書たれいう程の愛仕出さんもはうられすとかゝる本文の軍勢をも島々に渡し防禦せられさるならんあとこのほの亂防の折箱館奉行其外兵卒數人打死等の事あれとくた〳〵しけれゝこゝに洩しぬ

すへて此あたりの海上よて鯨の千本連といひて夥しく群り泳る事あり此ときゝ鼓あと打叩きもの音響かすれゝ是をおそるゝよや近よらす

評曰三國通覽蝦夷誌ニ鯨魚多シト雖モ夷人是ヲ取コトノ術ヲ不知カミ切ト云魚ニ嚙レテ鯨ノ磯ニ寄ルヲ取テ利スルノミ云々

此地一より十にいたる數の詞をゝしめとしてもろ〳〵の詞ともおほへ肥し置たるものあれと別に書出したれハ爰にハ書ハもイブリコといひて古木の朽たるやうなる物あり是第一牛馬のくすり又癇氣なとに用ひて妙あるものありテンの皮ウソの皮狐の皮鐵鍋なとを日本より出し陶器まさ烟管青玉なとは交易す滿洲にて至て賞翫するよし

滿洲の貴人の衣服をりとて唐太人の見せし事あり日本の純子の如きものよて背中に金絲にて龍の象を織りつけ袖うらにウソの毛皮をとつけさり

夷人の耳かねはすへて京都より多く下るなり

蝦夷附ロ

毒箭の事世の人の知る所あれゝ委しくいとすしらし近來ハ是を禁せられたるよしうち〳〵にゝ用ゆるものもあをありとそ人のうされり

昆布も長さ一丈餘幅二尺餘ほとのものは見受たりそれより大なるものハとあさらし

江戸の御役人奈佐何あしの君クナシリ島におゐてオロシヤ人とも六人水汲に島にあかりたるをみつけ蝦夷人ともゐ命して酒を與へさせ酔さるを生捕よしてチセロといふ所にてたし松前に送り津輕侯の陣屋に入御あつけとあり番人付にして種々美饌ともあたへ三とせはのりも置れたるよしなり彼家中數人警衛して折々オロシヤ人ともをつれあるあれしを見さりしに其長ヶ高きこと七尺或ハ六尺はありもあり頭ハ惣髪を組さけよして縮紗やうの衣服をつけ三尺ハかりの煙管を持居さり玆にまさ高田屋嘉兵衛といふものあり（淡路の出生よして兵庫よ渡り居て松前に行通ひし折にユトロフといふ島をひらかん事を願ひとりて大に利を得遂に帶刀御免まてありしかオロシヤにわたり歸りてかのユトロフにいたる事を禁せられ淡路島に隱居かまへしておはりたりし）五月の比よもあらんうエトロフよおゐて阿蘭舍に捕られて翌五月の比またクナシリ島へ連來りたりしか箱館ゐおゐてうけうさ有へきよりあしこまて船やるへきよしゐて江戸御役人之内高橋何がしの君麗本何あしの君たち箱館よおゐて立會せられ高田屋か受方オロシヤの六人御渡し事ありし

評云船長日記ニ（上畧）かくて淡へ入て碇をおろしけれハ件のルダカウ（カムサスカの代官也）日本の詞ゐて日本人々々と呼けるゆへ十吉出て對面したりルダカウいふハ兵庫の高田屋嘉兵衛を知りて居るかと問ふ知て居ると答ふ彼も無事にて日本へ歸りさり今は日本とオロシヤ軍もなしむつましくなりたれは互ひよ悦はし尙語らん事多けれハ翌日朝來るへし迎の人をおこすへしと云て日暮比にありされハルダカウは歸りぬ（此兵庫の嘉兵衛といふ者ハ樂ハ島目二貫六百文あらでは分かりしをユフの事にかたらひて樣々の工夫を仕出し今ハユフ地の事をうけがふ人とかりて大船十七艘もちて大坂江戸よも出店をもうけ松前箱館にてハ凡間口三十間はかりの家をかまへ年々運上一萬兩計も出もやうなる大富貴ありさきにオロシヤの船ユフへ來り亂放せんとしけるに北船に乘りオロシヤへ行たる大豪傑にてオロシヤにてもかゝる人ハ稀也とてオロシヤの人も折々言出して舌を卷居たりしとそ十吉歸りき）云々さてまた（上畧）過し年松前箱館へ來りて服部君高橋君抔の前へ出さる水主等より集て酒のみさる上抔にては折々其さまを真似戯れけり服部君を大樹と見請さるあと

て我服部にあらん否我こそ服部にあるへけれあるといひ爭也論ハ高橋よなれ某と村上貞介になれ嘉兵衛ハこゝへ來りたるときいゆえ〳〵しく見へされハ日本ふてハ見るかけもあくて居たりあるといふさて各並居て形をいあめしくしてニッセンッケ服部伊賀守高橋三平ソロタハラアケ（日本服金かふり物大に服立金衣）イソロタサブカレフカセルセエスなといひてまねひしあり日本ハ小さき島あれと神の國ゆへたやすく手さしハあられといふ事ハそこあしとにても云を十吉聞さりしよし云々又同記中ゆ文化十三子年十吉喜三左衛門其外日本に歸るときラッコ島（オロシヤの領内）エトロフ島（ユゾヘの領内）の（此間海上十一里）沖間來りて船頭ペケッがいへらく（上畧）らほとに霧深くありてもはや松前まてハ船乘あさけれハオロシヤ國よ乘歸り來年六七月の比を待て連來るへしといふを十吉喜三左衛門強て橋船の小船をもらひうけて本船より乘移りからうしてエトロフ島に着たり云々とある評にこれは深き故よし有とと也今日本とオロシヤとハ互に心とけたりといへと先にもオロシヤ人松前に捕られ三年ハかりも居たる事なれハさハいへ今ハいかある心をかおこして又も捕ましきにもあらすとかたり障りを貫立て松前まてハ至らすして歸りしものあらんか此兩人も其生捕のことをほのかにきゝ居たるゆへうち〳〵に貫合せ置て小船をこひ松前に歸らんといふあり云々と見へたり

下蝦夷ヲモロに運上屋あり人家四五十軒ハかりもあるへし蝦夷地第一の處にて一ヶ年一万兩の所務ある場といふ

同ニシベツハ鮭の名産よして江戸御獻上よもなるよし一尺八寸の魚よて本邦の人取扱ひ夷人よハ手をも掛さする事あきよし

ナコシリ島ハ松前より海上三十里餘にして圍り二里計りの無人島あり孰も出會の漁場あり八月十五日の夜に鰊納（ニシン）の多く來よあるを夷人とも取得る事

也

ソウヤは松前より海上二百里餘あり蝦夷地の御開所にて江戸より御藏本方其外御詰居ある所也このうちあはひ貝殊ゑ多し

クナシリ島と松前より海上二百里ばかり丑寅ゑ乘あり

評云夷地チモロより此島へ海上七里此島よりエトロフ島のタンチセイまで海上七里ありと或書ゑ見へたり

又評云船長日記ゑ(上畧)ノツケより三里といふ所ゑ至りて宿りたりかくて附添人のハふやう汝等を運の宜しき人ありエトロフとクナシリハ渡りハやゝもすれは難船ある所なるをまつ〳〵難なく蝦夷地へ渡り着ぬこゝより松前まてゝ地つゝきなりまつ〳〵幸なりと十吉曽やう七日う十日計かとおもひつるふそこはくの日數を經たり爰より松前へはいあはとあらんとハへハ三百九十里へありもあらんといふゑ胸つぶれたり云々とありて蝦夷地の廣大なる事おもひやらるゝ也

エトロフハ松前より海上二百里餘丑寅ゑ乘るありクナシリハ又大なる島あり

評云船長日記ゑ(上畧)エトロフ島海岸ゑある高山よりいとも〳〵大なる瀧落る高サ凡三十間計もあるへきの幅十三四間計りゑて巖の上より岸を離れて海の中へほとゝとし落る也云々この瀧那智のたきよりも大なりオロシヤ船海上十五里先より目印にして船をのるとあり云々又同記にフルエヘッハ此エトロフ島のうちゑての都會にていかめしき番屋もあり調役下役六七人同心廿人計高田屋の大船も三艘計見へたり云々

又評云或家秘錄(柴田筆記)(上畧)文化四卯四月廿九日九ッ半時すき八ッ時比とも覺しき異國船迫々近より元船二艘ハ沖懸りし橋船三艘會所河南の方をさして來る但し前後の船二艘とも形ち沓の如く小兒の虎子のこと

く小判なりあとも丸し孰もミな坐してかひをかく見受さる處四五十人も乘しやうに見へたり中の船一艘へ至て細長く丸太のことし前後に一人中に一人都合三人乘なり大筒ハこの船へのせ來りしと見ゆ支配人陽助命令を承りて附添六人銘々鐵砲をもち橋向の敵船のよせ來る方をさして行此内間宮林藏狂氣の如く會所の御門を幾度も出入て只今異國人上陸仕ちんいか丶被仰付候哉とのゝしる(中畧)河向の砂濱へ敵船のうち細長き三人乘の船着とすぐによゐとの大男壹人上陸草原の中へかけこみ下へうゞむ又殘貳人走り上り無程大筒を打出す尤前後貳艘の橋船は岸に付あ付ぬにはや船中より鐵砲を打出間もなく陽助殷を打れ蝦夷の同にかゝり會所のうら手より來るこの内我山の上の陣所より來る見あけはしり行戸田氏早く療治致し可遣と申聞云々(中畧)さて陽助か手負て引時赤人とも直に付こゝ河向の粕屋迄來り是を橋にして三四人

鐵砲をうつ此方より折しき筒先を揃うさゞ矢ところへ近し勝口あるへきを殘念々々赤人ハ惣體大男ゑて練兵なり鐵砲のとり廻し駈引の速なる事かり味方玉のゞら〳〵來るにあきれ玉の行方を跳居る玉つき早くする事ハさし置ひとつ放してハさきを跳居るハ如何そや云々(中畧)さて七ツ半時過き粕屋藏に籠り居たる赤人壹人味方より板越に打懸り敵ハ手負を橋船へ引取行跡にて藏燒いたす傍の小屋々々燒出す津輕家陣屋も燒出夜ゟ入鎗焚に不及白壹の如し(中畧)兩大將とも戸田鎗谷鎗もたす南部衆も鎗不持と見へたり津輕衆ハ各鎗を着す兩家とも人數も少く聞へ兵糧も津輕ハかりゑあり玉藥ハ何れゑも御不足なり赤人等ハ六十人ゑは足らす日本人ハ三百もあらんか夷人まてあつむれハ千人ほとの人數云々(中畧)拔戸關兩氏に從ひ逃行れし後にて密に思ふゑかく亂放せられ御武器を初め諸しな奪れ一字も不殘燒拂しハ本朝の恥をおもはさる愚

さよと初て是を悔ゆ扨是迄ハ強き事とも折々云出しうもはやにくるとなるにハ風の音草の音足の音こそ〳〵するにもおそろしく覺へ我身あらもあく成行しやとあきるゝはかりなり會所に伺置し猿ハあれ走來り暗夜に人よとり付けるゑ赤人來りたりと大騒動也云々(中略)扨〳〵なり〳〵戸田氏を尊て山の半よ行見れハ自害と見へて朱にありてこときれたり書置に拙者懐中よ六匁玉六ッありとのみ記し候外の事ハなし云々

評云 阿蘭陀船渡來記といふ書に戸田久太夫は箱館來行下調役百俵五十人扶持高にて三十四歳於蝦夷自殺云々又或家覺書に津輕侯より六月三日御届書之中にエトロフ諸南部大膳大夫幷私人數散乱同處諸御役人之内討死等も有之哉鐵砲厳敷打かけ難防趣御届聞と之所相分不申旨在所より申來候尤エトロフ島の儀は松前表より遠き島よ御座候へハ箱館詰居候家來も聞々相分不申候尤いかゞの樣子よ御座候哉注進未申來候由在所より申越候此段御届申上候卯六月三日

下蝦夷アッケレクスリウス抔の邊濟家浄土の寺二字建立ありて人をゝち引物を教へらるゝよし

評云蝦夷亂妨の事書たる或家秘録よ(上略)文化十三子八月松前より四十里北曰の善光寺といふ寺ある所よ至るとゝゑ僧濃善光寺如來の分身の本尊ある寺よ一日滞留云々と見へたり因よいふとのあたりの風俗よ各熊の子をあひ置て近所の人々を招集て此熊の子の首をきり落し其首を机やうの上ゑ乗せ置さてその肉をは奠よして主客ともとりてやし後みゑ〳〵彼熊の首よ向ひ拜禮を終りて山よ持行埋置てこれよさま〳〵の事を祈る事ありと或人かたりけり

蝦夷地マシケル、セッペイシカリチセロ其外クナシリエトロフの諸所よりいつる鹽鮭一ケ年大凡五十萬本はかり江戸よ行なり

上蝦夷地オカセイといふ出崎ハ松前より八十里餘子丑ゑあたるなりとの所

ヨオカセイ様といふ神のおれしますよしいひ習ーたりこゝより北方へ蝦夷の女夷ともおそれて行事あし若こををそむきゆけハ祟あるよし日本の船こゝを往返することヨ兼もて船を造りて神酒洗米あと備て船ヨ流し置て通るあヒさてヒか船の帆をおろすことあらひありこれをおろそのヨして通る時ハかならすさま〳〵の災難あるよし

評云都てはてなき海はら遠き國ヨてもさま〳〵の神のみいづもあるが中ヨあの尾張の國の十吉等文化十酉年より同亥年まて三とせまて山も見へぬ洋中又ハ日輪を北の方ヨ見る所又十二月下旬ヨも赤裸ヨて暮ヨ堪かねさる海上なとヨ深ひ至りそしき食物の今ハやゝつきはてんとするヨせんすへなく今ハ縊れ死へくや薬くすとあり果んか又ハ何方に船さしむけやらんと其折々に觸て御國といふ事して伊勢男山濱岐あとの神にことゝひ祈りしことに寄き鳥貳ッ又ハ白き鳥貳ッ宛かはる〳〵いつことなくく飛來り船の先ヨとゝまりし事三年がうち十日又ハ十五日の間にハ必ありしが終ヨイギリス船ヨ助けられ慈あく故郷に歸りしことゞも船長日記といふ書ヨ記たり實にこの皇國ハ神の幸ひ賜ふ事のとふときうしとき今更こゝヨいさゝめこと引出ていひいたしたるハ中々あるわさあめをと外國の孝ひのみヨ醉されたる人々ヨ一種のくすり施さんためにのミにこそ

リイレリハ洋中にある最も高き島ヨて四時雪を頂き形粗富士に似たり其めくり三里ハかりもあらんか晴天ヨハ七十里ハかり隔たる海上よりもよく見ゆるありこの島蝦夷松殊に多く大木いくらも並たりめくり一丈五六尺ハありありて千五百石船の帆柱ともあすへき大木あり鱈の名産大鮑大蚶多し人家も廿軒餘またいと〳〵清らあなる清水も湧出て船人多く汲とるあり

評云三國通覽蝦夷陸ヨ加藤清正朝鮮ヲ陷レテナランカイヘ亂入レ其都

城ヲ燒拂ヲ後高山ニ登ヲ東ヲ眺望スレハ日本ノ富士山ヲ能見ルト濟正
も軍士も大ニ不思議ヲナシタル事アリ貝原篤信是ヲ評シヲ其山ハ富士
ニハ非ス薩摩ノ開門ナルベシト云リ又或說ニ伯耆ノ大山ナルベシトナ
リ小子按ニ皆非ナリ其山ハ蝦夷國ノ西海中ニ在ルリイシリナルベシ云
々とありて諸國を考へ本文の話によりて林子平かいへる事そらごとな
らしとせんあ

ジプンシリハ松前より二百里ハあり子丑にあり鮑あまこ多くリイシリの夷
人等こゝゑ來り取得るなり

イシカリといふ所のあたりに丹頂鶴多し日本の鶴よりハすくれてふとく其
長け六尺ハありもあらんと見ゆるなりこの地鐵砲なけれハ是をとり得る事
あらさるゆへう人を見ておそるゝけしきもまたなし先年松前侯より網もて
多くとらせられ生なうら獻上にもなりたりしよし

アンホも昆布の名產なり此所に大河あり幅百間とありもあらんか三十里餘
の流れなるよし船に造る大木を流し下す也

ルゝセツペイといふ所の河是また船木の大木を流し山す松前の船乘とも折
々此所ゑ船大工鍛冶なとの人々伴ひ行船を作しめ歸るものあり

コカヲ山ハ西蝦夷第一の高山なり百里內外いつれの海上よりも能見ゆる山
也けり

唐太島は樺太島のことなり歐人之を呼て薩哈連と稱すその位置は僅に一葦水を隔てゝわか北海道の正北に對し北緯四十六度より五十四度に至る南北よ長くして東西へ極めて短し地氣酷た寒冱として曠原蔽澤多く山あり河あり海灣魚介に富み林野土宜を產す兵學日本地理小誌に此島古來我國の屬地たり古書及ひ地勢を以て之を證す誰か又疑を容れん但其地の荒陬なるを以て古人之を度外に置けり魯西亞、西伯里を服してより又將に南を圖らんとす謂ふ所隴を得て又蜀を望む者のみ寛政中間宮林藏等此地を經營す爾來松前氏及ひ函館奉行交々之を管轄す而して前數年岡本文平島中を經歷し極北よ

至り始めて其地理を詳にすることを得たり初め德川氏の時幌子谷以北を割て魯に與へんとす魯人聽かず遂に約して雜居の地とあす明治八年八月特命全權公使榎本武揚魯都に駐劄し遂に此島を以て彼の古利兒群島と交換の約を結ふ多年漁場の事是に於て始て定る然りと雖も北門の鎖鑰豈一日も之を忽にするを得んやとあり是先つ我晉へんと欲する所を晉へるものあり

此書へ文化年間周防なる小郡岐波村の船頭三保喜左衛門(海宰翁)か屢々唐太島に渡航せしとき親しく見聞されたることゞも多けれへ其後天保の頃小郡の代官役布施虎之助氏(御牆)村のおさたちに問ひて三保翁の說話をあきつゝり之に諸書を參照して評釋を付せらるゝ且つ林仁左衛門氏その奇處に就きて數種の圖畫を挿入せられたり然れとも此書原本既に湮滅に歸してその在る所を知らす予幸はその傳寫本を得たるを以て今之を印行して同好に頒ち永く世に傳へんと欲す但圖解は巨費を要するかため止むことを得す刪りて載せす遺憾殊に尠からさるあり

明治二十四年十月十一夕東京の四家山莊に於て風聲窓戸を叩き飢鼠寒厨に叫ふころ燈下に被衾を擁して志るす　陳文館主人　源　春仔

明治二十四年十月十二日印刷
明治二十四年十月十三日出版

編輯者　山口縣士族　村田崇次郎　東京市四谷區伝町七十二番地

發行者　東京府士族　稲垣常三郎　同神田區淡路町一丁目一番地

印刷者　東京府士族　堀田道眞　同京橋區山下町二十二番地